



Diagnosis of non-immediate hypersensitivity to amoxicillin in children by skin test and drug provocation tests: A retrospective case-series study

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 浜松医科大学 公開日: 2022-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加藤, 由希子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/00004121

論文審査の結果の要旨

アモキシシリン (AMPC) を代表とするペニシリン製剤に対するアレルギーは小児において比較的多く遭遇するアレルギーであり、即時型と遅延型に分類される。このうち遅延型ペニシリンアレルギーの診断は、ペニシリン製剤使用数日後からの皮膚症状や、皮内テスト、リンパ球刺激試験の結果に基づいて下されることが多い。しかし、これらの診断法では遅延型ペニシリンアレルギーを必ずしも正確に診断できない。例えば皮内テストは特異度が高いものの、感度が低い問題点がある。薬物経口負荷試験は最も確実な診断手法であるが、侵襲的な検査法であり、疑い例全例に施行することは困難である。このため、小児における遅延型ペニシリンアレルギーの正確な頻度は不明である。また、遅延型ペニシリンアレルギーと関連する年齢や性別、皮疹のタイプなどの背景因子も明らかではない。

申請者は、ペニシリン製剤の中でも AMPC を対象として、臨床的に遅延型 AMPC アレルギーを疑われた患者の中での遅延型 AMPC アレルギー患者の頻度、およびアレルギーと関連する背景因子について、後方視的症例集積研究を行った。アレルギー検査として皮内テスト、薬物経口負荷試験、リンパ球刺激試験を用いた。研究は、浜松医科大学臨床研究倫理委員会の承認を得て行われた。

27 例の遅延型 AMPC アレルギー疑い例のうち、皮内テスト陽性者は 12 例 (44%) で、皮内テスト陰性 15 例のうち 2 例が薬物経口負荷試験陽性だった。そのため、14/27 例 (52%) が遅延型 AMPC アレルギーと診断された。アレルギー群と非アレルギー群とで背景因子に差はなく、診断のためにはアレルギー検査が必要であると結論づけた。またリンパ球刺激試験結果もアレルギー群と非アレルギー群間で差はなく、リンパ球刺激試験の有用性は高くないと結論づけた。

審査委員会では、小児の遅延型 AMPC アレルギー疑い例における正確な疾患頻度と検査の有用性・限界を明らかとした点を高く評価した。以上により、本論文は博士 (医学) の学位の授与にふさわしいと審査員全員一致で評価した。

論文審査担当者

主査 本田 哲也

副査 乾 直輝

副査 中村 祐太郎